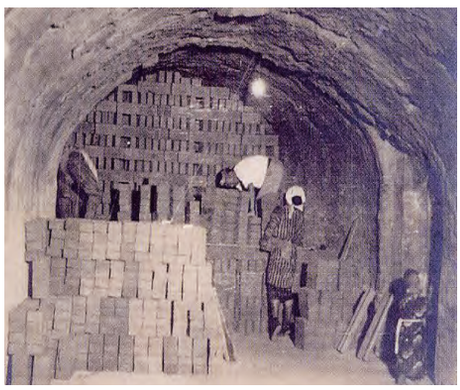
⑤ 鶴見川

鶴見川は、曲がりくねっていることに加え、傾斜が緩やかであるため、大雨が降るたびに下流で洪水を繰り返し、人々の暮らしを脅かしてきました。一方で、鶴見川は流域に豊かな恵みをもたらし、人々の暮らしを支え、地域特有の文化を育んできました。

煉瓦

横浜開港後、日本で西洋建築の導入が進み、煉瓦の需要が増加しました。矢向など鶴見川下流域では、川岸の土が粘土質で煉瓦の製造に適していたことから、明治から昭和初期にかけ、たくさんの煉瓦が製造されました。製造された煉瓦は、船便で東京駅や丸の内のビル街、横浜の赤レンガ倉庫など多くの建設現場に出荷されました。

関東大震災で煉瓦造りの建造物が倒壊したことで需要が減ったため、震災後、煉瓦工場は姿を消していきました。



煉瓦工場の様子（写真提供：鶴見歴史の会）

製材

原木を輸入する横浜港に近かったことなどに加え、流れが緩やかで木材の運搬に適していたことから、かつて鶴見川の下流の川岸には製材工場が多くありました。川岸には製材前の多くの木材が係留される光景が見られました。

製材工場が多かった鶴見川
（写真提供：鶴見歴史の会）

鶴見川の川岸で係留される木材

舟運

大正末期頃まで、鶴見川流域は回船業が盛んで、川筋は多くの船で賑わいました。茶舟または伝馬船と呼ばれる長さ６メートルくらいの小さな船から、建築用材などを運ぶ大きな船も行き来していました。

右は、大正 13 年に行われた第五神力丸の進水式の写真です。第五神力丸は、大正末期から昭和初期にかけて沖泊まりの船から沿岸の工場への貨物輸送船として活躍しました。

第五神力丸の進水式

文学

人々の暮らしと深い関係にあった鶴見川は、庶民の姿を描く文学作品の舞台にもなりました。鶴見に住んでいた芥川賞作家八木義徳氏が昭和 29 年に発表した『少女図』は、鶴見川の川沿いを舞台にした作品です。鶴見川を散歩中に美しい少女を見かけた主人公は、その少女にすっかり心を奪われ、また一目見ようと鶴見川に通い続けます。ある日、主人公はついに鶴見川のそばの工場で少女を見かけます。そこで主人公は、少女の家が貧しく、少女は小舟で鶴見川を上り下りして川沿いの工場で菓子を売り歩いていることを知るのでした。鶴見川の川岸に広がる湿地帯の風景とともに、川沿いに生きる貧しい少女の姿が主人公の目線から美しく哀しく描かれています。